

異文化コミュニケーション

NEWSLETTER: Intercultural Communication

No.19 June 1994

INTERCULTURAL COMMUNICATION INSTITUTE
KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES
1-4-1, Wakaba, Mihama-ku, Chiba, 261 JAPAN

〒261 千葉市美浜区若葉1-4-1
神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所
(Phone) 043-273-1233 (Fax) 043-272-1777

当研究所主催の第29回異文化コミュニケーション講演会が3月4日に神田外語学院にて開催された。日本の若年層の減少傾向が続き、我が国の社会は「大学淘汰の時代」を迎えている。21世紀を目前にして、大学はどのような変化をとげるべきか。この差し迫った問題について、我々は小山宙丸先生（早稲田大学総長）を講師にお迎えし、非常に示唆に富むお話をしていただいた。以下はその内容である。

変動の時代の新しい大学のために

Concerning the Future of Japanese Universities

早稲田大学総長 小山宙丸
Chumaru KOYAMA
President, Waseda University

「異文化コミュニケーション」という言葉を、こちらの研究所が採用された神田外語大学の開学当初、この言葉はほとんど社会的に認知されていなかった。しかし、10年を経ずしてよく知られたものとなった。今回は、異文化コミュニケーション講演会ということで、その立場から「新しい時代の大学像」に焦点をあてて論じてみたいと思う。

変動の時代

20世紀は、日本の場合は1945年を境にして、戦争の時代と平和の時代とにわけることができる。現在、世界的規模での変動があり、勿論日本も多大の影響を受けているが、日本の平和の状態は重んじられるべきであろう。その変化の大きさはあまりにも甚大で将来の予測ができない。このような時代において、大学をめぐる状況も大きく変化しつつある。大学の改革は、現在盛んに行われ、これからのあるべき大学を考える上で時代の変動は無視できないものがある。

今日の日本の大学事情

最近でも大学新設の動きは衰えていない。確かに、条件が整えば、文部省は認めざるをえない。一方で、18才人口がピーク時202万人から10年後には150万人に激減する。大学の冬の到来が叫ばれ、改革が進行している。多数の大学が潰れるという予想もあるが、15年前にそのピークを迎えたアメリカの大学

の現在の状況を見ても判るように、真剣に取り組む限り、それは起こらないであろう。大学人として我々は共存共栄でゆきたいと思う。そもそも終戦時に48校であった大学が、現在1130校（短大を含む。専門学校を含めれば4030校）となり、アメリカよりも高就学率を示している。こういうことを見れば21世紀も生きぬいてゆく力が、日本にはあると思う。実際、日本における大学は、江戸時代の藩学・郷学・寺子屋の遺産や、新日本の成立と共に最重要になった教育問題への熱心な取り組みによって、急速に発展したのであって、とりわけ、4年制大学535校中、391校を数える私立大学の躍進は誠に目覚ましいと言えるだろう。

「大学生批判」の批判

さて、日本の大学生に対して、入学後は勉強しなくなる顕著な傾向があるとよく言われる。このような大学生について、一方では、自由な放し飼いの時期として肯定的にとらえられるが、他方では、受験戦争の故に消耗した学生を表現するものとして語られる。しかし、この種の批判は、日本とヨーロッパの関係から日本とアメリカの関係へと重点が移る東西の交流の変動（従来、日本人は留学した後直ちに帰国し、熱心に働いた。これが日本の国力の振興に繋がったが、この勉学の熱心さの対象が今や欧州からアメリカへと移されている。）や、戦前はヨーロッパ式、戦後はアメリカ式となった大学制度のために、アメリカを基準にしてなされるものであって、本来的には日本固有の大学の問題として考え直されなければならない。

日本における新しい大学像

それでは日本における大学の本来の在り方についてどのように考えればよいのであろうか。このために少し歴史的に日本における学問の姿勢について振り返ってみれば、例えば、『論語』によれば、「学びて時に之を習う、またよるこばしからずや」とあるように、「学び」は「真似び」であることがよく知られている。また世阿弥によれば、「稽古は強かれ、情識はなかれとなり（『風姿花伝』）」とあるように、古典や手本を尊重してこれを学び、反対に自分の自由な考えを否定する、という徹底した学問の在り方があることを我々は認めることができる。これは、西洋の思想、例えば旧約聖書冒頭の創造の考え方と比較すれば、い

特集：日本人と異文化

今回は日本人の「フェイス」に関して考察した小論2点と日本人の異文化受容を歴史的に概観した論考を寄稿していただいた。その3篇を以下に紹介する。

中国人と日本人における面子の概念 Japanese and Chinese Concepts of Face

北星学園大学講師 末田清子

Kiyoko SUEDA

Assistant Professor, Hokusei Gakuen University

中国人⁽¹⁾のフェイス(臉)の概念には二つの側面がある(Bond & Hwang, 1986)。一方がいわゆる面子であり、成功や見栄により得る世間の一個人に対する評判に関わるものである。他方は、個人が社会の規範に従おうとする廉恥心に関わるものである。中国語では面子のことを臉面(顔)と表現し、臉に関わる表現は日常頻繁に使われる。面子は中国人のコミュニケーション・パターンや対人関係のルールを説明するのに重要だとされている(Hu & Grove, 1991)。日本でも顔および面子に関する表現は頻繁に使われる。しかし中国人と日本人が面子に関して全く同じ概念を持っているのかどうかは疑問である。筆者は、中国人と日本人の持つ面子の概念はどのように違うか、またその違いが双方間のコミュニケーションにどのような影響を与えるかを探究しようと試みた。

質的な多様さを探るため、面接調査を行った。調査の対象は教育機関に関わる人に限定し、中華人民共和国で暮らした経験を持つ日本人5名、10年以上にわたり中華人民共和国出身の留学生及び研修生を指導している日本人2名、日本に滞在する中華人民共和国出身の研修生及び留学生10名にインタビューし、得られた情報をKJ法により分析した。その調査結果の中で下記の3点を報告したい。⁽²⁾

まず、中国人の面子の概念は、経済力や能力に対する他者からの評価に関わるものであるようだ。例えば日本人の割り勘のシステムを中国人は恥ずかしいと感じる。奢るつもりでいた中国人に対し、「彼らに支払わせる訳には行かない」と断わる日本人の「良心」が相手の中国人の面子を潰すことにもなり兼ねない。また“できない”“わからない”と言わなかったり謝らなかつたりするのは、中国人がそれを自分の面子に関わると考えている為だとある調査協力者は指摘した。しかし日本人にこの認識がないと、“中国人はすぐに言い訳をする”、“自分の非を認めない”というような否定的なレッテルを貼ってしまうことになる。

第二に、中国人にとっては、本人や相手の面子の重要さは上下関係に関係なく、本人の実利実益に関わっていると見えよう。例えば、ある日本人の調査協力者が自分の部屋の掃除をしてくれる服務員に「自分で掃除はしなくてもいい」と言ったところ、その

いわゆる日本人の従順さ(「日本人はおとなしい」と西洋人の積極性(「西洋人は自我が強い」として批評される)民族性の違いがよく理解される。(実は日本人にも、例えば直長や玄白などに創造性の特徴が認められる。)またこれは、大学においては、帰国子女の自己主張の問題にも現れている。既に述べたように、この日本人の特性は勉学の熱心さとして現れ、国の発展に大きく寄与したが、他方で(欧米)排外主義となって自らに批判の基準を持たない状態になっていると思われる。この意味で、日本は現在主体的に考える時期にきていると考えられる。大学も同様なのである。逆説的ではあるが、今必要なのはむしろ文化的「鎖国」とも言うべきものである。日本の大学が目指す道は、「新しい日本独自の人間像」を描き出し創造することである。「新しい大学像」は、そこから生まれてくる。

質疑応答

大学における留学生受け入れの問題について

決して安易に考えてはならない問題である。住居、習慣、環境、その他多くの問題に対処する必要がある。経済的な準備をかなり整えなければならない。大学間交流においても同様で、アジアの国々の事情を考えれば、五分五分の関係になることは少なく、たえず持ち出しを覚悟して協力しなければならない。

大学の数の多さと大学の進むべき方向について

日本人の教育の熱心さや、アメリカの大学の動向を見れば、漫然と構えない限り大丈夫であろう。一般的に言えば、日本は今や選択の時代であり、日常生活ではむしろ不購買の努力が必要なのである。それだけ個性的な価値が意味をもつ時代なのであって、その点で各大学もまた真剣に考えていかなければならない。

私学助成の大学院への傾斜について

確かに、学部への補助は据え置かれ、大学院への補助は増額されている。しかし、大学教育の中心は学部教育であることは変わらない。その上で、日本の大学院生の数は欧米と比べて極めて劣ることを考えていかなければならない。それ故、大学という組織として、学部を充実させ、大学院の必要性を社会に認めさせ、そして研究所と共にお互いに協力しながら各々の使命を明確にしてゆく必要がある。

「新しい大学像」について

大学における授業は食事のようなものである。これを土台にして、その上に学生が色々なものを積み重ねてゆくのが大学生活である。早稲田大学でいえば、「緊張感のある自由な大学」であることを考えている。また、「大学像」を見出すためには、先に「人間像」を考えなければならない。転換期にある現在、大学の「国際化」が1つのキーワードである。各大学が工夫して、次代を担う日本人の教育をしなければならない。その上で世界の人々との交流・共存をめざして、新しい大学を創造してゆかなければならない。

(神田外語大学助教授・樋笠勝士 記)

服従は“悪者にされた”と言って大層憤慨したという。この例は丁(1988)の“中国人の面子は身分の差を問わない”という指摘に呼応していると言えよう。また、この場合服従は“悪者にされた”為に部屋を掃除することで得られる様々な特権(例えば引越しの際に外国人が置いていく持ち物が手に入ることを奪われるのみでなく、他の部屋を担当できるチャンスをも失う。故に憤慨したとも解釈できよう。つまりこの例は“中国人の面子は実利実益に関わる”という内山(1991)の主張を支持する。

第三に、これに対し日本人の面子は本人の実利実益や能力の欠如に必ずしも関係ない。例えばある日本人はアルバイトの紹介を中国人の学生から頼まれて必死で探したが、その学生が自分の話より後に来たアルバイトを選んだので、「彼らこそ日本人には面子もないと思っているのだろうか」と憤慨していた。実際、彼の紹介先にその学生が行くか否かで彼に実利があるというわけではない。しかし、彼は自分に最初に頼んだという筋を通さないこと、そして自分の立場を相手が考慮しなかったことを不快に思っていた。これに呼応するように、「日本では私が私より偉い人の面子を潰すのはとても悪いことだが、偉い人が私の面子を潰すのはそうでもない」と中国人調査協力者の一人は述べている。これらのことから、日本人の面子は“自分の社会的な立場が相手からどのように受け入れられるか”に関わり、相手との上下関係によって面子の判断基準が変わると言えそうである。

本調査はまだ予備的なものであるが、以上の結果から下記の2点が指摘できよう。まず、本調査をティン・トゥーミー(Ting-Toomey, 1988)の論点に照らし合わせてみよう。同氏は集団主義的文化圏と個人主義的文化圏のフェイスの違いに着目し、その違いが摩擦や対立の対処の仕方に反映されているとした。しかし、本調査の結果は同じ集団主義的文化圏に属する日本と中国でもフェイスの側面である面子の概念は違うことを示唆している。集団主義対個人主義という二分法では不十分であろう。第二に、近年在日外国人と日本人との文化摩擦が報告されているが、それを単に日本人の排他性、価値観の違いと大枠で括る前に一つ一つの言葉の概念だけでもかなり違うことを認識する必要があろう。

注

- (1) ここでは中華人民共和国の中国人に限定した。
- (2) この調査結果の一部は筆者が年報社会学論第6号(1993)に発表した論文の内容と重複している。

参考文献

Bond, M. H. & Hwang, K. (1986). The Social Psychology of Chinese People. In M. H. Bond (Ed.) *The Psychology of the Chinese People* (pp.213-266). Hong Kong: Oxford University Press.

Hu, W. & Grove, C. L. (1991). *Encountering the Chinese*.

ME: Intercultural Press Inc.

丁 秀山『中国人の生活哲学』(東方書店、1988年)。

Ting-Toomey, S. (1988) Intercultural Conflict Styles. In Y. Y. Kim & W. B. Gudykunst (Eds.), *Theories in Intercultural Communication* (pp.213-235). CA: Sage Publications.

内山完造『中国人の生活風景』(東方書店、1991年)。

表情と文化

—感情のコミュニケーションと表示規則—

Facial Expression & Culture: Communication of Emotion & Display Rules

宇都宮大学教養部講師 中村 真

Makoto NAKAMURA

Assistant Professor, Utsunomiya University

感情表出について日米の大学生を比較した研究がある。カリフォルニア大学パークレイ校のアメリカ人学生と早稲田大学の日本人学生に、アフリカのある部族の割礼の儀式を記録した映画を一人で見てもらったところ、両者とも嫌悪の感情を感じたと報告し、実際に嫌悪の表情を見せた。ところが、同じ映画を実験者と二人で見て、映画についての面接を受けるという場面では、アメリカ人が一人で映画を見たときと同様の苦々しい表情を交えて感想を述べたのに対して、日本人はにこにこ微笑みを絶やさず話したという(Ekman & Friesen, 1975)。これは、欧米出身者の日本人に対するイメージとしてよく取り上げられる不可解な笑いの一例である。なぜ日本人はこのような場面で笑うのだろうか。欧米人が不可解だと感じるのはなぜか。ここでは、日本とアメリカをそれぞれ一つの文化と見なし、Ekmanらの実験で観察された日本人の微笑を例に、感情のコミュニケーションにおける文化的ルールについて考えてみたい。

先行研究によると、人間には幸福、怒り、嫌悪などの感情を表す汎文化的表情があることが報告されている。感情のコミュニケーションにおいて表情は非常に重要な役割を果たしているが、先に紹介した日本人の笑いのように表情が必ずしもそれに対応した感情を反映していない場合がある。このような表情の文化差を説明するために、Ekman & Friesen (1969)は「表示規則(display rules)」という概念を仮定した。つまり、日本には他者と接しているときに不快感を示すような行動をしてはいけないという文化的な取り決め(表示規則)があるために、実際に感じていた嫌悪を笑いでごまかした、というわけである。

上述の実験場面において、感情表出の文化差に関わる要因をまとめると以下の4点があげられよう(中村, 1993)。大学の実験室での面接という「状況の性質」、

年長の面接者という「被験者（表出者）の相手の性質」、大学生という「表出者の性質」、嫌悪という「感情の表出のしやすさ（その感情をどれくらい表に出してよいか）」。一般に、公的な状況では私的状況よりも感情の自由な表出は抑制される。しかし、同じ状況でも文化によって異なる意味をもつ場合があり、「大学の実験室での面接」という状況は、アメリカよりも日本において公共性が高いと考えられる。また、「面接者」が年長の教官や大学院生であったことを考えると、アメリカ人よりも日本人の方が感情を制御しようとするだろう。一方、「大学生」の捉え方については、ある程度分別を備えた大人であるという意味では日米で類似している。以上を総合して日本人の行動を解釈すると、感情を抑制して接するべき面接者を相手に話をするという場面で、実際に感じた感情を表に出さなかったということになる。分別のある大人の行動としてはきわめて納得のいく当り前のことである。しかし、所属する文化が異なり、日本人がこのような窮屈な状況におかれていたことが理解できない者にとっては、その行動は不可解に映るだろう。

さらに、感情の種類によってそれを表情として表してよいかどうか文化によって異なることが考えられる。例えば、「嫌悪」という感情の捉え方に文化差はないだろうか。筆者は日本とアメリカの大学生それぞれ72名を対象にして、表情の出しやすさについての調査を行った(中村, 1993)。この調査では、幸福、驚き、恐れ、嫌悪、悲しみ、怒りという6種類の感情について、「公的な場面と私的な場面で、本当の感情をどの程度表情に出すか」について7段階で答えてもらった。結果は、総じてアメリカ人の方が感情を表情に出す程度が高く、アメリカ人は表情が豊かだという我々のイメージと一致した。状況によって表情の出しやすさがどのように変わるかを見ると、日米共に公的状況よりも私的状況で表情を出しやすい。また、私的状況においては、程度の差こそあれ日米で感情による違いはほとんどなかったが、公的状況においては大きな日米差がみられた(但し、幸福と驚きが最も表出しやすいという点では同じだった)。つまり、アメリカ人が最も表情に出さないと答えているのは悲しみで、次に、怒り、恐れ、嫌悪と続く。一方、日本人は、嫌悪を最も出しにくく、次いで、怒り、恐れ、悲しみが続く。つまり、公の場面では感情によって表出のしやすさに文化差があり、日本人は嫌悪を最も表しにくく、アメリカ人は悲しみを最も表しにくいと考えているという結果がでた。

嫌悪の表情は、腐ったものなどを口から吐き出す行動に起源をもつ、イヤだという拒絶の感情の表れである。日本人ははっきりとノーと言えないとよく指摘されるが、ノーという拒絶の意志表示を嫌悪感を表すことと解釈すれば、これは日本人には最もやりにくいことになる。そのため、嫌悪を感じるような公的な場面では、本当の気持ちを隠そうとして笑いで繕うのであろう。アメリカ人の基準に従えば、どちらかといえば表しやすくない拒絶の感情を、日本人はあえて隠し

ていることになる。そのうえ不器用に笑っていたりするので、彼らに不可解だとか不誠実だという印象をもたれてしまうのではなからうか。しかし、日本人の基準では、決して表に出しやすい感情をあえて隠しているわけではない。嫌悪は最も出しにくいだけでなく、人前に出してはいけない感情なのである。我々はこのような基準(表示規則)を、実際に知識としてもっているのである。

感情のコミュニケーションにおいて誤解の原因となる様々な文化差が考えられるが、表示規則という概念を仮定することによっていかなる要因が誤解の原因となっているかを説明することができる。さらに、これまでに行われてきた人類学的調査や社会学的研究などの成果を組織的に解釈することができるだろう。

ここで紹介した研究は質問紙による調査であり、感情表出についての知識を調べたものである。従って、この結果を実際の感情表出やその解釈に一般化するには自ずと限界がある。今後は、より具体的な規則をリストアップする作業と、その規則を観察や実験の手法を用いて実証的に確認する作業とを平行して行い、学際的に研究を進めていかなければならない。

引用文献

Ekman, P. & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica* 1, 49-98.

Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. Prentice-Hall.

中村 真 1993 文脈の中の表情 吉川左紀子・益谷真・中村 真(編)『顔と心—顔の心理学入門』サイエンス社

The Japanese Pattern of Intercultural Communication: The Indigenous vs The Seaborne or *Kochira* vs *Achira*

Jun Toyama
Professor, St Andrew's University

It is always difficult for anyone to clearly distinguish what is purely of indigenous origin from what is not in a given culture. This is the case with Japanese culture, too. With her geographic and historic features, the morphogenesis of Japanese culture has been formed in strata, with the newly imported laid over the older. We often observe that the old and the new go together in Japanese history.

As an archipelagic country, located not too close to and not too far from the continental shores. Japan has "voluntarily" imported

many elements from earlier advanced civilisations overseas, especially from China. This early Japanese contact with China is recorded in an ancient Chinese history book of the Han dynasty. According to these Chinese official records, Emperor Kwang-wu (光武帝) awarded the King of Na of Wa (Japan's ancient name) a gold seal in AD 57, and in 1784 this actual seal was excavated in northern Kyushu.

In AD 538, Buddhism was officially introduced into Japan from Korea. This highly advanced thought of Indian origin had already been transformed into an amalgam of Indian and Chinese tradition before its Sinicised version was introduced to Japan by way of Korea. There was a comparatively short period of debate and confrontation among aristocratic leaders over whether or not this practice of "foreign gods" should be "received" into the land of their indigenous *kami*. The Japanese Emperors chose both the invisible gods of their ancestry and the flashy, visible ones from an exterior higher civilisation. *The Chronicles of Japan*, compiled in 720, describes the Emperor Yomei (died 587): "The Emperor believed in the Law of Buddha and revered the Way of Gods." Prince Shotoku, the Emperor's second son and Regent to the Empress Suiko, offers another good example of this compatible orientation to the old and the new or the indigenous and the foreign. They did not take the stand that the new, foreign thought should exclude the old, traditional Japanese values. They never assumed an either/or attitude towards the new value system. They merely tried to add the new to the old. There was no supersession of the old by the new.

The alternative orientation to *Kochira* (this side here) or *Achira* (that side over there) has not developed in this island country where it has proven impossible for the islanders to reject either their ancestral cultural heritage or the new values arriving from more advanced continental civilisations. They have chosen to live with both simultaneously.

Since Buddhism was officially introduced into Japan over 1,450 years ago, the Japanese have struggled with and cherished this foreign thought. Buddhism was welcomed by

both the political and cultural elites, including the Imperial aristocracy and the warrior class, in each period from ancient to modern, with the only exception occurring during the Meiji era when for several years after 1868 some Buddhist images and temples were destroyed by fanatic Shintoists.

In short, the Japanese have developed a cultural pattern of communication with superiors and foreigners who were believed to be transmitting new or more advanced knowledge to the "less civilised" home islands. They tended to place themselves in the inferior position and take the role of listeners. In other words, for many centuries they were good learners of civilisation, but not good teachers.

Some 140 years have passed since Japan opened her doors to the Western world. Since then, the Japanese have struggled to find a better way to communicate with the rest of the world and have seemed to have acquired some knowledge of how Westerners communicate with others. The Japanese have learnt how to coexist with the foreign culture of Buddhism for over 1,450 years. Yet it still must be a hard job for anyone to have the Japanese speak up because they are still heavily oriented to assuming a learner's position while many in other cultures appear to be rather teacher-oriented.

A Japanese proverb says, "Water flows down." So does information. The teacher sends it: the learner receives it. If the teacher will not send it, then the learner has to work very hard to acquire the information.

Now as communicators, the Japanese are perhaps best described as "patient"; and they are very positive readers and listeners. When listening, they prefer to "double-track," leaving the old information on the old track and placing the new information on a new track. I call this type of information processing "double-track processing" to distinguish it from its alternative, "single-track processing." Now in communication the teacher or sender is always in the "single-track" mode. Yet the Japanese have not been able to adapt well to the single-track mode, which they view as confrontational. In fact, it took them about fifteen centuries to change seaborne Buddhism into an essential part of Japanese cul-

ture. Actually, it is practically impossible to change a nation's communication patterns which play such a decisive role in the growth of a culture.

Culture is produced by information clusters conveyed by communication. And a culture, from this perspective, might then be defined as maldistributed clusters of marked, biased information. Therefore, the same subject or object can be described as "communication" in its active aspect and as "culture" in its passive aspect. This constitutes a producing-produced relationship with given information. The transformation of one nation's communication patterns or culture isn't just a matter of the passage of time. It is well known that Buddhism has exercised great influence on the Japanese mind, but at the same time, the people have influenced it perhaps more than they have been influenced. Now we see Buddhism in contemporary Japanese society having transformed itself to fit in with the nation's conventional mores in ancestor worship and funeral services.

References

Toyama, Jun (1988), "Nihon Bunka to Ryoritsu-gata Komyunikeshon" ("Japanese Culture and Double-track Communication"), *Intercultural Communication Studies No. 1*, Intercultural Communication Institute, Kanda University of International Studies.

Yamaori, Tetsuo (1989), *Kami to Hotoke (Shintoism and Buddhism)*, Kodansha.

Watanabe, Kosho (1992), *Nihon no Bukkyo (Buddhism in Japan)*, Iwanami Shoten.

研究所からのお知らせ

第30回 異文化コミュニケーション講演会

日時：1994年6月10日

18:30~20:30

テーマ：日本における国際理解教育と
グローバリズム

講師：川端末人（神戸大学名誉教授）

会場：神田外語学院 本館7階講堂

第4回 幕張夏期セミナー

日時：1994年9月3日~5日

テーマ：異文化コミュニケーションの教育と研究

内容：講演、研究発表、ワークショップ（6つのうち2つに参加）、ディスカッション等

会場：新日鉄幕張研修センター、神田外語大学
問い合わせ先：当研究所

【開催案内：6月上旬に発送予定】

学会・研究会開催予告

名古屋異文化コミュニケーションセミナー

日時：1994年8月25日~28日

開講セミナー（6つのうち1つを受講）：

異文化コミュニケーション入門

外国人留学生アドバイザー入門等

参加費：35,000円（宿泊費、食費込み）

申込締切日：1994年6月30日

問い合わせ先：近藤祐一（南山大学）

〒466 名古屋市昭和区山里町18

Tel. 052-832-3111 ex. 552

日本コミュニケーション学会第1回九州支部大会

日時：1994年10月2日

9:30~16:30

テーマ：国際コミュニケーション

—過去、現在、未来—

会場：長崎純心大学・純心女子短期大学

問い合わせ先：東条加寿子（九州女子大学）

〒807 北九州市八幡西区自由が丘1-1

Tel. 093-691-3331 ex. 624

【研究発表、実践報告等募集中】

The Summer Institute for Intercultural Communication 1994

Session 1: July 20-22, 1994

Session 2: July 24-29, 1994

Session 3: July 31-August 5, 1994

Intern Program: July 16-30, 1994

For more information, contact:

The Intercultural Communication Institute

8835 SW Canyon Lane, Suite 238, Portland,

Oregon 97225 USA

Phone: 503-297-4622 Fax: 503-297-4695

The 5th International Conference on Cross-Cultural Communication: East and West

Date: August 15-19, 1995

Place: Heilongjiang University, Harbin, China

Theme: Ethnicities, Language, and Communication across Cultures: East and West

Proposal Deadline: October 15, 1994

For more information, contact:

Prof. Nobuyuki Honna

Aoyama Gakuin University

4-4-25 Shibuya, Shibuya-ku, Tokyo 150